

開会のご挨拶



木村 容子 先生

東京女子医科大学附属東洋医学研究所

お茶の水女子大学を卒業後、中央官庁入省 (国家公務員1種)

英国Oxford大学大学院 修士課程修了

2000年 東海大学医学部 (学士入学) 卒業

2002年 東京女子医科大学附属東洋医学研究所 助教

2007年 同研究所 講師

2008年 同研究所 副所長

2010年 同研究所 准教授

2019年 同研究所 所長/教授

本シンポジウムは、寺澤捷年先生、後山尚久先生と歴代コーディネーターが続けてこられた「こんな時には漢方を」の基本コンセプトを継承しつつ、「漢方エキス製剤の上手な使い方 - 困ったときの この一手 -」と題し、新たな目線で現代医療へエキス漢方を取り入れる実践的な方法を、エキスパートの先生方によるディスカッションを通してご提案したいと考えております。

今回は、婦人科、泌尿器科、皮膚科、耳鼻咽喉科、消化器内科、漢方診療科の先生方にシンポジストとしてご登壇いただき、幅広い分野にわたる漢方治療の実際についてご紹介いただきます。

第一部では、西洋医学だけでは十分に把握できなかった病態や治療に難渋していた疾患に対し、漢方エキス製剤を併用したことによって、より優れた効果や高い満足度が得られた症例をご提示いただき、日常診療における漢方療法の取り入れ方、文字通りエキス製剤の上手な使い方について検討いたします。

第二部では、頻用処方の中から葛根湯と当帰芍薬散を取り上げ、各科での使用経験を通して現代の“口訣”を考えてみたいと思います。この2処方は、コロナ禍における様々な不調にも各診療科で広く用いられており、今後ますます西洋医学との融合が目され有効性が増していくと予想される処方です。

各先生方が患者さんを診療するときに頭の中でめぐらせている考えを、できる限り具現化し皆様にわかりやすくお示しすることによって、明日からの臨床に少しでもお役に立てるシンポジウムを目指したいと思います。